

『楞伽經』における分別事識

鄭 有 植

0. はじめに

5C 頃の大乗經典である『楞伽經』(*Laṅkāvatārasūtra*, LAS) において瑜伽行唯識思想が説かれていることは周知の通りである。特に第二章「三万六千の一切法の集成」では、多様な術語を用いて諸識を分類しながらまとまった形で識説に言及している。しかし經典自らは各術語の内容について詳細な説明を施しておらず、さらにそれらの術語も他の文献ではあまり例を見ない LAS 固有のものなので、LAS の識説を正確に理解することはときに困難である。よって、各術語の意味内容の確定が LAS の識説の理解のためにまず必要であろう。そこで本稿では、それら術語のうち分別事識 (*vastuprativikalpavijñāna*) に焦点をあて、LAS の記述を中心に分別事識が意味する内容を考察してみたい。

1. 分別事識に関する諸見解

先行研究においては、分別事識の解釈について、研究者たちの見解は必ずしも一致していない。本論の検討に入る前に、これまでの先行研究において提示された代表的な解釈を簡単に要点だけまとめておく。

① 勝又 [1961] pp.337, 624-625: 分別事識=意・六識=転識

② 安井 [1972] pp.5-7: 分別事識=第六意識

この中、安井 [1972] は『聖入楞伽經註』(以下、LASV) を引用しながら分別事識を第六意識に配当しているが、LASV の当該箇所は次のように述べる。

「マハーマティよ、現識 (*khyātivijñāna*) と分別事識、その二つは」というのは、対象の形象を理解する諸識のことである。現識は眼などの [五] 識の範囲に [あるものである]。 / 分別事識は意識である。(LASV, P 78b1-2, D 67b6-7)

このように、LASV では、分別事識が第六意識であると解釈されているが、高崎 [1981] p.87 はこの解釈について疑問を呈している。つまり、LAS では八識をた

で、それらを現識と分別事識の二つに分類しているのに、LASV のように現識を五識に、分別事識を第六意識に解釈してしまうと、八識という前提と矛盾するのではないかという疑問である。（八識を現識と分別事識に分類していることは以下において考察する）

一方また、勝又 [1961] は三つの漢訳と梵本に基づいて、アーラヤ識と如来蔵を同一視する LAS の特徴的な考え方を踏まえながら、結論として分別事識を前七識から成る転識と解釈している。

2. 分別事識に関する『楞伽經』の記述

次に、LAS において分別事識がどのように説明されているのかを概観したい。

先に述べたように、LAS では諸々の識をいくつかの方法で分類しており、その際、識と関連した多様な術語が用いられているが、それらの術語の中に分別事識が提示され、次のように説明されている。

マハーマティよ、八つの特徴によって説かれた識は、まとめると二種類である。〔二種類とは、すなわち〕現識と分別事識とである。

マハーマティよ、たとえば、鏡に色の把握があるように、現識に〔色の把握が〕現れるであろう。

そして、マハーマティよ、現識と分別事識とのこの両者は区別された特徴をもたず、相互に原因となるものである。

マハーマティよ、その中で、現識は不可思議なる潜在印象の転変を原因とするものである。

また、マハーマティよ、分別事識は対象の分別を原因とするものであり、また無始時來の戲論の潜在印象を原因とするものである。（N p.37¹⁴-38²）

以上のように、LAS は、八識を現識と分別事識に分類することができると述べ、次いで現識に関する喩えを取り上げた後、現識と分別事識との両者が無区別で、互いに原因となる関係であると説明し、最後にその両者の原因について言及している。

3. 分別事識に関する考察

3-1. 『楞伽經』における分別事識とアーラヤ識との関連

先の引用に

(1) また、マハーマティよ、分別事識は対象の分別を原因とするものであり、また無始

時來の戲論の潜在印象を原因とするもの（anādikālaprapañcavāsānāhetukam）である。とあった。この記述は、分別事識の二つの原因に関して説明しているが、分別事識そのものを説明しているわけではない。しかも、この術語に言及するのはLASでもここ一箇所だけなので、LASから分別事識の内容に関する直接的な情報を得ることはできない。したがって、以下においては、分別事識の原因に関する記述と関連する用例をLASの中から取り上げて、分別事識の内容について検討することにする。

如来蔵について説明がなされている箇所に、

(2) 無始時來の種々の戲論の龜重の潜在印象によって印象づけられたものであり、アーラヤ識と呼ばれるものであり、無明住地より生ずる七識をともなつて、あたかも大海と波のように、常に断絶されない体をもつもの〔である如来蔵〕が活動する。（T pp.3-4, N p.220^{13-16}}）

とある。この前半部を要約すれば、

(3) 「如来蔵はアーラヤ識とよばれるもので、無始時來の戲論の龜重の潜在印象によって印象づけられたものである。」

となる。この一文は次のような理解も可能である。

(4) 「アーラヤ識は如来蔵ともよばれるもので、無始時來の戲論の龜重の潜在印象によって印象づけられたものである。」

LASでは、しばしば如来蔵とアーラヤ識は同一視されているので、ここで両者を置き換えて理解することも妥当であろう。例えば、「如来蔵の語で呼ばれるアーラヤ識が転換しないとき、七転識の消滅はない。（T p.6, N p.221^{12-13}}）」とある。

(4) を先の (1) と比較すると、分別事識は、無始時來の戲論の潜在印象を原因とするものであり、一方、アーラヤ識は、無始時來の戲論の龜重の潜在印象によって印象づけられたものとされている。このように、分別事識とアーラヤ識はいずれも、無始時來の戲論の潜在印象の緊密に関係していることが分かる。

3-2. 『顕揚聖教論』のアーラヤ識

次に、瑜伽行派文献の一つである『顕揚聖教論』（以下、『顕揚論』）を取り上げて分別事識とアーラヤ識との関連性を検討してみたい。『顕揚論』には、分別事識の内容を確定するにあたり、注目すべき以下の記述が見られる。

アーラヤ識とは、前〔世〕に作られ増長した業と煩惱が条件となり、無始時來の戲論の潜在印象が原因となつて生ずるものを言う。

阿頼耶識者、謂先世所作増長業煩惱為縁、無始時來戲論熏習為因所生。（『顕揚論』大正

蔵 No.1602, Vol.31, p.480c3-4)

とある。このように、『顕揚論』に見られるアーヤ識の説明では、下線部がこれまで見てきた LAS の説く分別事識の内容と重なることがわかる。

4. まとめ

以上、LAS と『顕揚論』を中心に分別事識の指示する内容について検討を行った。LAS の当該箇所は分別事識の具体的な内容について言及していないが、LAS と『顕揚論』の関連記述から、分別事識にはアーヤ識と一致する側面があることが確認できる。

〈使用テキスト及び略号〉 N : *The Laṅkāvatāra Sūtra*, Bunyiu Nanjio ed., Bibliotheca Otaniensis Vol.1, Kyoto : Otani University Press, 1923. T : *A Revised Edition of the Laṅkāvatāra-sūtra, Kṣaṇ-ika-Parivarta*, Jikido Takasaki, Tokyo : Private Publishing, 1981.

〈参考文献〉 勝又俊教 [1961]『佛教における心識説の研究』東京：山喜房佛書林。高崎直道 [1981]『『入楞伽經』のマナス（意）について』『古田紹欽博士古稀記念論集 仏教の歴史的展開に見る諸形態』東京：創文社，75-89。安井広済 [1972]「入楞伽經にあらわれる識の学説について」『大谷學報』52-2，1-15。

〈キーワード〉『楞伽經』、『顕揚聖教論』，分別事識 (vastuprativikalpavijñāna)，現識 (khyātivijñāna)

(東京大学大学院)

掲載されなかった諸氏の発表題目 (1)

經・論を解釈するための四大教法 (cattāro mahāpadesā)

青野 道彦 (東京大学大学院)

大谷探検隊収集 *Ratnakūṭaparivarta* の断片について

堀 伸一郎 (国際仏教大学院大学研究員)

『大般涅槃經』に記される不動世界と阿闍世国王との関係

佐藤 直実 (宗教情報センター)

vow's power.

194. *Vastuprativikalpavijñāna* in the *Laṅkāvatāra-sūtra*

Yu-shik CHUNG

The term *vastuprativikalpavijñāna* used in the *Laṅkāvatārasūtra* has so far been regarded as the *manovijñāna* or seven *pravṛttivijñānas* etc. However, it can be concluded from my investigation of the characteristics of its relevant terms as described in the *Laṅkāvatārasūtra* and the 『顯揚聖教論』 that the *vastuprativikalpavijñāna* is therein given almost the same characteristics as those of the *ālayavijñāna*.

195. On the Six Characteristics in the *Ārya-daśabhūmi-vyākhyāna* (ADV)

Kyung-nam KIM

The Six Characteristics (六相) generally have been positioned as the basis of the “Interfusion of the Six Characteristics” (六相円融) from the Huayan (華嚴) school’s standpoint, but not much study has been done on the Six Characteristics in the ADV itself. The purpose of this paper is to clarify the meaning of the Six Characteristics in the ADV, specifically focusing on the transfiguration of an equivalent and the context of the Six Characteristics.

In conclusion, we can find that the Six Characteristics, used as the method of annotation in the ADV, are more embodied in a comparison of the *Daśabhūmika-sūtra* (十地經). Also, it is noted that transfiguration of the Six Characteristics is shown more clearly in the Tibetan version of ADV than in the Chinese version.

196. On the Citation of the *Svapnanirdeśa* in the *bSam gtan mig sgron*

Izumi MIYAZAKI

The Gradualist chapter of the *bSam gtan mig sgron* (SMG), ascribed to gNubs chen Saṅs rgyas ye śes, cites from the *Svapnanirdeśa* (*Svap*), a part of